

至るところにある「美」を探すために You can find “beauty” in anywhere

秋庭史典『[あたらしい美学をつくる](#)』は美学についての本であるが、評者である私の専門は美学ではない。しかし、この本はとて興味深く読めたし、文面から多くの勇気・励ましをもらったような気がする。「なぜだろうか」と考えていると、『あたらしい美学をつくる』は、あたらしい領域を切り開いていくための「ハウツー本」なのだという結論に至った。この本には、これまでとは異なる美学の作り方の手順・アルゴリズムが書いてある。明解な方法論と共に「あたらしい美学」がまさに作られていく過程に私はワクワクし、著者のその姿勢に勇気をもらったのである。

「美」は「自然とは何か」「自然のなかでわたしたちはどう生きるべきか」という問いに対して、私たちの目を開かせると、秋庭は考えている。『あたらしい美学をつくる』では、このような「美」を探すことが美学の課題として設定される。この課題に答えるために、秋庭はカントが重きをおいた「感性」から離れ、ヒトを特別視しない思想を示すライブニッツを取り上げ、「情報の流れの中の世界」における美のあり方を探る。そして、秋庭は「あたらしい美学」をつくるために芸術作品ではなく自然科学との対話を続け、美とは対極にあると考えられがちな自然科学の中に、現在における美のありかがあることを示す。

秋庭は自ら実践しながら、読者に「あたらしい美学」をつくることを促す。そこで、秋庭が示すアルゴリズムに従って、私も「美」のありかをひとつ探してみたいと思う。「書評」という行為からは離れてしまおうが、各々の実践こそがこの本を楽しむ一番の方法だと考えるからである。そこで、秋庭が示すような「美」を探すために、本の最後に記されているフローチャート(秋庭, p. 207)に従って作業をすすめていきたい。フローチャートには「芸術作品が対象ではない」「歴史的美学が対象ではない」「カント的な主観の認識能力を前提しない」「集合論が多を統べる一を持ち込むとは考えない」という4つの設問がある。それらの設問に対して「そうではない」と答えると「あなたが行なっていることは既存の美学の領域です」ということになる。例えば、「芸術作品が対象ではない」に「No」と言ってしまうような対象を選ぶと、あなたがやっているのは「あたらしい美学」ではなく「美術史・美術批評・芸術哲学・芸術学ですよ」ということになる。

さて、最初の設問「芸術作品が対象ではない」に「そうである」と答えるために、対象をウェブサービスのツイッターにする。ツイッターとは140文字以内でテキストを投稿するマイクロブログである。フローリアン・クレマーは、ヒトとコンピュータ、コンピュータとコンピュータなど様々な階層をもつ「インターフェイス・デザイン」は美学の盲点となっていると指摘する(Cramer, p.125)。私はこれに加えてウェブサービスも今までの美学では扱うことが難しいと考える。しかし、秋庭の「あたらしい美学」はこれらを扱うことができる可能性をもっている。そこで、私は「あたらしい美学」が自然科学だけではなく、情報科学にも応用可能であることを示したい。

ツイッターを対象とすることで、次の分岐点である「歴史的美学が対象ではない」に対しても「Yes」と答えることができる。しかし、ツイッターに「美」を求める自体がナンセンスと言う人が多いかもしれない。そう思う人こそ、『あたらしい美学をつくる』を読んでほしい。秋庭の考えに寄り添うと、ツイッターのような対象に「美」を探すという姿勢こそが大切なのである。このような態度を情報技術に対しても持つことで、「情報というもうひとつの生態系をつくり出している『自然』」のなかで、私たちがどのよ

うに生きていくべきか」という問いが、ツイッターによって示される可能性が開かれるのである。

次に進むと、「カント的な主観の認識能力を前提しない」とある。これは難しい設問である。ひとまず、秋庭が参照するライブニッツの「ヒトを特別視しない」という考えから、ツイッターを考察してみたい。ツイッターの特徴は、他愛もないコミュニケーションがほぼリアルタイムで行われるというところにある。これだけを見ると、ツイッターはヒトを中心としたシステムのように思える。しかし、この特徴を成立させている最大の要因である「1ツイート140文字以内」を考えてみると、ツイッターはヒト中心のサービスと一言では言えない設計であることが示される。

なぜ140文字以内なのか。それはケータイのショートメッセージサービス(SMS)が160文字以内であることから決められている。20文字は発言しているユーザ名の表示にあてると、残りが140文字ということになる。ツイッターの140文字という制限は、ヒトが何かを言うために適した文字数ではなく、システムの制限から決められている。ヒトは140文字では思い通りに意見を言えないかもしれない。ヒトを中心に考えればこの時点でシステムを練り直す必要がある。しかし、システム側から考えると、既にあるSMSという仕組みを効率的に利用することが第一である。そこでツイッターは「ヒト中心か、システム中心か」ということになるが、現在においてもツイートは140文字以内であるという事実からは、ヒトよりもシステムがツイッターでは優先されていると考えることができる。それは、ツイッターが世界に浸透していく中で、システムがヒトの認識を形成し直しているとも言える。つまり、ツイッターは「カント的な主観の認識能力」に対して、システム側から制限をかけることで、情報の流れの中にヒトを特別扱いすることなく位置づけているのである。だから、ツイッターを考察することは、情報システムとともにあるヒトのあたらしいあり方を探るという可能性を導くのである。

最後の分岐は「集合論が多を統べる一を持ち込むとは考えない」である。これもまた難しい設問であるが、「ツイッターは議論に向かない」と言われていることから考えてみたい。そもそも140文字以内という制限のなかではヒトは言いたいことを言えない。さらに、ツイッターではタイムラインと言われる表示枠にツイートを留めておくことができない。ツイートは次々に流れていってしまう。言いたいことも言えずに、すべてが流れて行ってしまうツイッターでは議論を弁証法のような積み上げてひとつの結論へと至ることが難しい。これは「結論」をしっかりと求める今までの考え方からすれば、とても不完全な状態である。しかし、ひとつの結論には結びつかないけれど、多くの思考の断片としてリンクを張り巡らしながらタイムライン上で遷移していく集合的思考としてツイッターを考えてみたらどうか。

ツイッターにあたらしいコミュニケーションの可能性を見出す東浩紀は『[一般意志2.0](#)』の中で、ツイッターの構造が以下に引用する社会モデルと相同を示すと書いている。

小さな共同体と小さな共同体が衝突し、融合し、弁証法的な過程を経て大きな全体性の獲得へと至るヘーゲル的なモデルではなく、無数の共同体の乱立を乱立のまま放置しながらも、そのあいだを情報技術に支援された「憐れみ」の情が確率的に往還し、共同体と共同体のあいだを縫い合わせることでゆるやかな全体性を確保するまったく別種の社会モデル。(東, p. 227)

東は社会モデルについて書いているのだが、この考察は秋庭の「集合論が多を統べる一を持ち込むとは考えない」にとっても近いアイデアだと私は考える。東はルソーの「一般意志」という18世紀には全くの虚構であったアイデアが、情報技術によって「神秘主義ぬきで、技術的に『実装』することがで

きる新しい可能性(東, p. 23)」を、私たちが手に入っていると語る。秋庭もまた、現在の自然科学には「被造物と創造の秩序の認識は、神抜きで、状態遷移と認識の問題に置き換えられている(秋庭, p.122)」領域があると記している。秋庭は自然科学、東は情報技術と寄り添う対象は違うが、共に「神抜き」の視点から、多が多のままで遷移しながら間接的相互作用を行なっていることを認識できるアイデアや実装の中にあたらしい美のありかや政治のあり方を見つけようとしている。

これまでの考察から、ツイッターは「集合論が多を統べる一を持ち込むとは考えない」というアイデアを実装したウェブサービスだと考えることができる。そして、東がツイッターにあたらしい政治の可能性を見ているように、この「1ツイート140字以内」という仕組みを実装したウェブサービスは「情報というもうひとつの自然のなかで私たちはどう生きるべきか」という価値を示している。それゆえに、ツイッターには「美」があると言えるのである。

以上で、ツイッターを対象として、フローチャートの一番下に着いたことになる。私は美学のことをほとんど知らないが、フローチャートの分岐点を「そうである」と肯定しながら下に行くたびに、世界との関係が開けていくような感じがした。その結果、ツイッターにはひとつの美、それは情報の流れという「もうひとつの自然」における「美」があるということが示せた。秋庭の『あたらしい美学をつくる』は、自然科学との対話によって「美」を見つけるのみだけでなく、そこで示された手順・アルゴリズムを用いることで、情報技術にも「美」があるということを教えてくれる。この本は情報技術によって、次々のアイデアが「実装」されていく時代における「美」のありかを示してくれる。もちろん、『あたらしい美学をつくる』は情報技術以外にも応用可能である。私たちは秋庭が示したアルゴリズムとともに、至る所に「美」があることを示していかなければならない。

参考文献

秋庭史典『あたらしい美学をつくる』みすず書房, 2011年.

東浩紀『一般意志2.0』講談社, 2011年.

Cramer, F. (2011) "What Is Interface Aesthetics, or What Could It Be (Not)?" , Andersen, C.U. & Pold, S.B. ed., [Interface Criticism](#). Aarhus University Press, pp.117-129.